

東京神學大學報

T O K Y O U N I O N



T H E O L O G I C A L S E M I N A R Y

No. 331

MARCH 7, 2025

●卒業礼拝説教

「キリストの福音にふさわしい生活を」 日本基督教団仙台広瀬河畔教会 牧師 望 月 修

●卒業式励ましの辞

日本基督教団 総会議長 雲 然 俊 美

日本基督教団気賀教会 牧師 楠 本 史 郎

●全学修養会・基調講演

「礼拝・祈り 私たちは何と戦っているのか」

日本基督教団横浜指路教会 牧師 藤 掛 順 一

「韓国の教会と神学校における礼拝と祈り」 日本基督教団奥沢教会 牧師 洛 雲 海

「祈りの生活——心の目が照らされることを願いつつ」

日本基督教団代田教会 牧師 平 野 克 己

●日本伝道研究所主催 公開講演会

「日本における伝道の根本課題～戦時下の『日本的キリスト教』を読んで考えたこと～」

東京基督教大学 特任教授・前学長 山 口 陽 一

●第53回教職セミナー 主題講演

「福音を生きる：伝道者の霊性」

東京神学大学 教授 小 泉 健

●新卒業生の声

2024年度 修士学位授与者提出論文一覧

《聖書神学専攻》

佐藤 潤 ルカ文書における「昇天」の出来事の神学的意義
——物語批評的解釈による

中根 一茂 わたしの内に生きているキリスト
——ガラテヤ書2章15～21節の釈義的分析から

眞木 重郎 絶望と希望の交錯——哀歌第5章の神学的視点

《組織神学専攻》

浅見 和花 エルサレムのキュリオスの秘義理解における一考察

北田翔太郎 カール・バルト『教会教義学・神論』における選びの教説
——存在論、認識論そして信仰論

金 奎植 ウィリアム・レーン・クレイグのキリスト教弁証
——特に無神論への弁証を中心に

権 ヨセフ 李樹廷の韓国基督教会における聖書翻訳と宣教の歩みに及ぼした影響について

佐藤 晏 宮川経輝の神学思想
——その全体像の把握と教会理解の位置づけに関する試み

杉田 流司 カール・バルトの聖化論

増尾 隆司 ジャン・カルヴァンおよびユルゲン・モルトマンの中間状態論

矢島 若葉 キリスト教の死の理解と葬り——教会の始まりから宗教改革期まで

ヤング肇子 北森嘉蔵の「神の痛み」理解についての一考察

説教「キリストの福音にふさわしい生活を」

フィリピの信徒への手紙 第1章27～30節

日本基督教団仙台広瀬河畔教会 牧師 望月 修



遣わされた教会で心掛けて来たことは、礼拝の説教者として、また牧会者として「罪の赦し」を告げることでした。いつも「罪の赦し」を告げるわけではないかもしれせん。大切なのは、聖書の説き明かしによって、神に背き逆らう罪を明らかにし、キリストによる贖いに基づく救いがあることを、「福音」として取り次ぐことです。

考えてもみてください。誰も、自分に向かって、罪の赦しを宣言することはできません。自分以外の誰かが、しかも、神から遣わされ立てられた者、その者が果たす務めです。教会の礼拝において説教壇に立つ者、牧師として立てられた者が為し得る行為です。その意味で、「福音の説教」を語る者であるとの自覚が、伝道者として教会に遣わされる者に独自の使命を担わせることになると思っています。

ですから、是非、福音への理解を深めてください。そして、その福音を聞く者に届く言葉として語ってください。間違はなく、大胆に、率直に、力強く、そして、豊かにです。「牧会」は魂への配慮をすることですが、事柄に即して言えば、福音をその人の個別の状況に応じて取り次ぐことです。そのために、厳しい言葉で譴責する必要がある時もあります。しかし、穏やかにです。

私にこれらのことができてい、と言っているではありません。先輩として、反省を込めて述

べています。私たちは聖書を読むことを大切にしていますが、聖書に福音が語られているからです。祈りつつ、繰り返し、聖書に立ち戻り、福音を確かに聞き、語り続けることです。

そうであればこそ、「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送る」(二七a) 必要があるのです。福音を告げる者が、福音に反した教えや行動を取ること、おかしなことです。しかし、そういうおかしなことが、キリスト者同士にあっても、起こるので

私たちは、「一つの霊によってしっかりと立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦う」(二七c) 同志です。昔から、異なる福音を語る者、福音でないことを語る者がいたのです。また、世の中が求めることに同調してしまう誘惑があります。そこで、「どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだ」と。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神に

よることです」(二八) と告げられています。これから、各地に遣わされる皆さん。その地で働く「同志の者」を見出してください。共に研鑽に励む交わりを作ってください。伝道者は誰よりも孤独を知っています。しかし、孤立してはいけません。福音を取り次ぐ者同士、説教をし牧会をする者同士、伝道する者同士が、これらをめぐって、

勉強会をなさったらいよいよう。どんな組織でも、同業者同士の研学会があるものです。その上に、有志の研鑽の時を持つ方もいらっしゃるでしょう。私たち伝道者は、この「有志による研鑽」を積みむことが、殊更大切だと思っています。同じ福音を告げる者としてです。そのようなところで、教会と伝道をめぐって、率直に話し合い、悩みや労苦を分かち合い、励まし合い、慰め合うことができることが大事です。そして、何よりも、「祈り合う」ことです。

神が、キリストによる私たちの救いを、成し遂げてくださったのです。それ故に、この事実を受け入れようとしない人たちから、嘲られたり、時には、苦しめられることも起こります。しかし、聖書は告げています。「つまり、あなたがたには、キリストを信じることでだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」(二九)と。裁きや罰としてでなく、どこまでも「恵み」としてです。私たちが、伝道者として、信仰者として、神の栄光にあずかることができるように、他の信徒たち同様、神が鍛えてくださいます。この神学校を巣立つ皆さん。主イエス・キリストは、再び来られます。「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかりと立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい」(一コリント

一六・二三―一四)。

学長室から

学長 神代真砂実

毎年ドイツのヘルンフート兄弟団が発行している「ローズンゲン」は、日本でも「日々の聖句」という題で訳されて親しまれています。内容は日本語の題の通りですが、そこには日々の聖句だけではなく、その年の聖句というのも掲げられていて、今年(二〇二五年)の聖句は「すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい」(一テサ5・21) だということです。

これは、文脈からすると、特に教会で語られる預言のことを考えて、この手紙の著者であるパウロは語っているようです。けれども、もう少し広く受け止めてもよいでしょう。つまり、教会で語られる言葉や教えを吟味すること、そして、その中の良いものを大切にすることが言われていると考えてもよいのではないかといいことです。そうすると、この聖句は神学校の営みに触れた言葉であるようにも見えてきます。

「吟味する」というのは、批判的に考えるということでしょうが、その批判は「良いものを大事にする」とこと結びついていなければ、破壊的なままです。言い換えれば、批判的であるためのものさしは福音であるということです。福音という「良いものを大事に」していいこそ、健全に批判的であることができます。教会に仕える学問としての神学は、教会のあり方や歩みを検証しますが、それは、教会の土台である福音を守り、福音を中心にすることから切り離せません。

「いつも喜んでいなさい」



日本基督教団気賀教会 牧師
楠本史郎

ご卒業、おめでとうございませす。テサロニケの信徒への手紙一・五章十六節以下のみ言を味わいましょう。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」
主イエスの福音は、喜びの音です。教会で福音が語られます、喜び合います。そこに人が集まれます。もちろん、壁にぶつかることだってあります。その時、祈ります。みんなで祈ります。主は、喜ばせてくださいます。それを感謝します。教会が感謝に満ちあふれます。

かつて、石川県の輪島教会に遣わされました。去年の一月一日、この地は能登半島地震に直撃され、家々が壊れ、燃えましました。多くの尊い命が失われ、傷つきました。教会も、会堂が崩れました。けれども主の教会です。百年以上、主が支えてこられました。人が都会へ出ていきます。その度に、教会を支える人を起こしてきてくださいました。

十七年前も地震に見舞われ、牧師館が全壊しました。もともと古くて手狭でした。隣地が与えられるよう祈ってききましたが、その時には与えられませんでした。二〇〇七年の能登半島沖地震で隣家が倒れました。買ってほしいと頼まれました。そこに、新しい牧師館を建てることができました。昨年、召された勇文人牧師が労されました。主が祈りに応えて

くださったのです。災いの中でも、祝福してくださいました。みんな喜び、感謝しました。今回も、きっと主が祝福してくださいと信じています。新藤豪牧師を中心に、教会の方々、能登伝道圏、北陸の諸教会が一つになっで祈っています。教会が主の福音を伝えつづけ、主が人々を励ましてくださるよう、願います。主は応えてくださいます。その時、喜びがあふれます。感謝して主をほめたたえることでしよう。
主が喜ばせてくださいます。その祝福を伝えるのが伝道者です。喜びのみ言を語ります。
作家の井上ひさしが書いていました。
「むずかしいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをまじめに、まじめなことを面白く、面白いことを愉快に」
主のみ言は深いのです。それを、やさしく、誰にでも分かるように語ります。一生懸命、まじめに伝えます。むずかしく言うのではありません。面白く、愉快に語ります。それを聞けば、みんなが嬉しくて仕方なくなります。すると、そこには人が集まってきました。笑顔がはじけます。それが教会です。

「神の御前で語る」



日本基督教団 総会議長
雲然俊美

〈神の御前で語る〉
牧師（伝道師）として遣わされた者は、説教を語る務めを担います。それは、光栄ある務めであり、苦しみと共に、大きな喜びが与えられる務めです。
説教の準備をしている時、しばしば自分が、「耳ざわりのよい話」（Ⅱテモテ4・3（口語訳））をしようとしているのではないかと、いうことに気づかされることがあります。日々の暮らしてで労苦している方をただ励ますだけの言葉を語ろうとしたり、辛い思いや悲しみの中にある方に安易な慰めを語ろうとしたりする誘惑があります。しかし、聖書のみ言葉はそのようなことを語っていないことに気づかされるのです。そのようなわけで、説教の準備

において、私はいつもパウロの言葉に心に留めています。「わたしたちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています」（Ⅱコリント2・17）。
〈キリストの真実に支えられて〉
今年に入り、東神大で共に学んだ牧師が召されました。彼が召されたとき、すぐに、その週の主日礼拝における彼の説教の動画を視聴しました。きちんと説教の準備をし、丁寧な語り口で、神の深い慰めを語っていました。彼は、牧師としての務めにおいて多くの困難に直面し、教会形成において苦労しました。しかし、説教においては、神の御前において誠実に語り続けたのだと思います。

み言葉に、「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であります」（Ⅱテモテ2・13）とあります。牧師は皆、それぞれに弱さや欠けがあります。また、神と人との前で不誠実な自分を見い出すこともあります。しかし、それでもキリストの真実に支えられて、福音を宣べ伝える務めを担うべく立てられております。
〈神の御前に真実な教会の形成〉
神学校を卒業し、牧師として遣わされて40年経ちました。この間、伝道、牧会、教会形成においてたくさんの失敗をしました。その失敗の多くは、私のひとりよがり、の思いやりや善意が発端となっており、今、あらためて、キリストの教会は信仰によって立つという当たり前のことを

心に深く刻んでおります。牧師の務めは、当たり前のことを当たり前に担い続けることがとても大事なことであると思います。
そして、教会形成も、神の御前において、キリストの真実に支えられて担う務めです。キリストの体なる教会を建て上げるためには、自分の思いや正しさに固執することなく、教会に連なる一人ひとりと祈りを合わせて、共に神の御前で、神の召しとお導きに忠実に歩むことが何よりも大切なことです。
神の御前で、キリストの真実に支えられて説教し、教会を建て上げ、大胆に福音を宣べ伝えてまいります。

「礼拝・祈り 私たちは何と戦っているのか」



日本基督教団横浜指路教会 牧師 藤掛 順一

日本基督教団において私たちはもう長く「未受洗者配餐」と戦ってきた。その背後には「ミッシオ・デイ」(神の宣教)がある。それは「神↓キリスト(の体である教会)↓世界」という救いのみ業の図式を解体し、「神↓世界(教会)」と捉えることによって、キリストと教会を世界の中に解消しようとするものである。それによつて、イエス・キリスト(教会)はなくてもよいものとなり、神がこの世の救いのためになさっているみ業(それはおおむね、差別や抑圧からの解放として捉えられる)に関わることが大事であり、キリスト(ではなく人間イエス)はその一例に過ぎなくなり、その業を担っている者は他宗教であれ仲間だ、ということになる。そこでは洗礼はせいぜい「入会の儀式」、聖餐は「連帯のしるし」となる。

その背後には、第二次世界大戦後の欧米の教会における深刻な反省があり、「教会の外に救い無し」というような自己絶対化を放棄し、諸宗教の同価値性を認め合つていこうという態度がある。そういう「反省」は大事だが、それがキリストの福音への信頼喪失に繋がってしまうのでは「盤の水と一緒に赤子を捨てる」ようなものである。私たちの立つべきところは「ほかのだれによつても、救いは得られません。わたしたち

が救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」(使徒言行録四・一二)というみ言葉である。今日の教勢衰退の根本的原因は、教会自身が福音への確信を失い、先の使徒言行録のみ言葉にしっかりと立って歩めなくなり、福音のヒューマニズムへの解消が起つていることにある。(岡本知之「神の宣教(Missio Dei)」とキリストの教会」、芳賀力編『まことの聖餐を求めて』、326頁参照)

このこととの戦いの主戦場は、礼拝であり、そこでの説教や祈りである。その戦いの勘所を以下に四点示したい。

①信仰による義認の正しい理解 「信仰による」が「信仰という自分の良い行いによる」と捉えられていないだろうか。日本基督教団信仰告白において「神は恵みをもて我らを選び」が「ただキリストを信ずる信仰により、我らの罪を赦して義としたまう」の前にあることが大事である。我々がキリストを信じて罪を赦され義とされるのは、神の恵みによる選び、つまり神のご意志による。人間の信仰に先立って、神のみ心があるのである。信仰はその神のみ心に感謝をもって応答することである。このことは「ピステイス」(ガラテヤ二・一六など)をイエス・キリストへの「信仰」(新共同訳)と訳すか、イエス・キリストの「真実」(聖書協会共同訳)と訳すか、という議論と繋がる。「私たちの信仰」は勿論大事だが、それを可能にしているのは「イエス・キリストの真実」である。私たちの信仰は神の真実への応答であることを見失うと、信仰はヒューマニズム化する、つまり人間の業となり、道徳の教えになる。

②「ありのまま」信仰と罪の赦し 信仰のヒューマニズム化を典型的に表すのが「あなたはありのままよい」という言葉である。ヒューマニズムは「罪」を見つめず、従つて「赦し」が分らない。「ありのままよい」は自己肯定感の低い現代の人々に「福音」として受け取られやすいが、私たちは「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によつて洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(使徒言行録二・三八)と語っていかなければならぬ。罪に堕ちた人間がどんなに自己を肯定しても、それによつて神に創造された「極めて良い」(創世記一・三一)自分を取り戻すことはできない。罪人である人間には神による罪の赦しが必要なのである。

③「すでに」と「いまだ」の間 私たちは、キリストによる救いが「すでに」実現したが「いまだ」完成していない「中間時」を生きている。キリストの十字架と復活

によつて「すでに」実現した救いは、キリストの再臨によるその完成を約束しているのである。このことを待ち望みつつ生きるところに希望が与えられ、地上の歩みにおける苦しみ悲しみを忍耐しつつ生きることができると。「終末論的希望」を見失うと、福音は倫理道徳の教えになり、ヒューマニズムに解消されてしまふ。ヒューマニズムによる「終末論の喪失」との戦いが私たちの課題である。

④礼拝における祈り 礼拝における祈りは、個人の祈りではなく「教会の祈り」であり「公の祈り」である。私たちは主日の礼拝を「公の礼拝」(教団信仰告白)として守る。それは礼拝が世の全ての人々と関係する公共の(パブリックな)事柄だということである。説教も世の人々に対するみ言葉の宣言として語られなければならないし、礼拝における祈りも、世の人々を代表しての祈りであることを意識しなければならぬ。礼拝の祈りにおいて私たちは、その地の人々を代表して主の前に立ち、祈る。礼拝における祈りは、教会と社会(この世)とを結びつける。教会は社会活動によつてではなく(個人々がそれに関わることを否定するものではないが)、祈りににおいてこそ、この社会と関わるのである。

「韓国の教会と神学校における礼拝と祈り」



日本基督教団奥沢教会 牧師 **ナ** **グ** **ネ** **海**

東神大から修養会へのお招きをいただき、心から感謝しております。私の韓国での体験や考えを話してほしいと、御連絡をいただきました。

アカデミックなお話をするわけではありません。私は、韓国キリスト教の専門家でもありませんので、体験を中心に紹介したいと思います。私は、日本で育った日本人です。ナグネは、韓国語で「旅人」の意味があります。私も、神の国の旅人です。

修養会で率直に学生とお話できるのは、神様に与えられた幸いだと思えました。私は神学生時代に、韓国から東神大への留学生と知り合い、自分が韓国と韓国のキリスト教として韓国の人々について何も知らないことに気がつきました。その友が突然召されました。後に、私は祈る中で神様の御声を聞き、韓国へと導かれたのです。

東神大には、韓国からの留学生がおられます。韓国人は、こんなに楽しい隣人だとして理解いただければ、話しがいがあります。韓国の教会と神学校は、祈りと礼拝をととても大切にしています。

韓国には礼拝出席者が1000人を超える大きな教会も多数ありますが、それは全体の2%に過ぎず、60%は50人以下の教会と言われます。

韓国のキリスト者の特徴は、何よりもまず祈りをもつて始めることです。たとえば、牧師や長老が信徒宅を訪問する際には、挨拶もそこそこまず黙して祈ることから始めます。韓国のキリスト

者はよく祈ります。祈ることを大切にしているのです。いつでもどこでも祈ります。祈りは伝染するようです。

教会や神学校ではもちろんですが、家でも他の場所でもよく祈ります。祈りは、伝わりやす。祈りに集中できるよう、祈りの場所があります。祈祷室や祈祷院、修養館、修道院といった施設が準備されています。教会や神学校には、一人で祈るための祈祷室や、何人もが一緒に祈るための祈祷室が設けられています。

韓国は、日本とは地域教会や国家の置かれていた状況が異なります。苦しく痛い歴史があり、それを乗り越えた文化や社会状況、明るい人間性を受け止めてください。日本とは違う慣習にご理解いただき、違うことの大切さを尊重していただきたい。善きサマリア人を記憶してください。

違いといえば、日本では思いもよらないかもしれませんが、徴兵制のある韓国には軍隊付きの牧師がいます。「軍牧」と言われます。教会では8月15日に解放(独立)されたことを覚え、国家のための祈祷会が開かれます。軍隊付き牧師が軍服姿で聖歌隊員となり、教団総会で賛美するようなこともあります。

韓国にもいろいろな教会があるので、「韓国の教会は」と一括りにしてお話しすることはできません。それぞれの特徴があります。私のお話は、あくまでも私の仕えていた長老会神学大学院や長老教会を中心にしたものです。どの国の教会にも、独特なエッセ

スがありますので、その点はご理解いただきたく思います。韓国の方々の儀礼や行動様式、伝統、言語文化は、日本文化における所作とは異なる場合があります。

私が仕えたセムナン教会は、1888年に創立されました。今は、地上13階地下6階の建物で、主日には1万3000人の信徒の内、約6000人の信徒が礼拝を守っています。

神学大学院と教会には、祈りの部屋、個室の祈祷室があります。神学大学院では、どこで祈るのでしようか。祈祷のための個室、長神大の場合、本館の塔の螺旋階段部分に墜落防止の網が設けられてあり、各階に複数の祈祷室があります。各祈祷室には椅子が置かれています。それは祈祷の際に、あふれ出る涙を拭くのに必要なのではないです。学生寮にも祈りの部屋が設けられています。塔の祈祷室からは、祈りとも叫びともつかないような声が聞こえてくることもあります。神の御前で一人祈る祈りにおいては、人目を気にせず、飾らないのです。

東神大との交流では、これまで神代真砂実学長、朴憲郁先生、小友聡先生、中野実先生、小泉健先生など、何人も先生方が長神大に来訪され交流してこられました。

長神大では、日々の全学礼拝でさまざまな形式の礼拝が行われます。例えば、灰の水曜日の礼拝では、学生や教職員の額に灰で十字架を記すようなことが行われます。その他にも、クリスマス礼拝を始め、受難週の聖金曜礼拝、

復活祭礼拝、宗教改革記念礼拝などの日には、特色ある礼拝が行われます。時には朱基輦(トソン)牧師(日本支配時代に神社参拝を拒否し殉教した牧師)を記念する礼拝や、古代教会や中世の教会でささげられていた礼拝形式の再演など、特色ある礼拝の形がいろいろ試みられています。

これも前述のとおり、韓国には祈りに集中するための教会附属修養館や、祈祷院などの諸施設があります。祈りの形もいろいろです。毎朝、夜明け前に教会に集まって祈る早天祈祷、日夜祈りの火を消さないよう教会員皆でリレー式に祈りを続けるリレー祈祷、複数人で山に登り夜を徹して祈る山祈祷、皆で声を出して一斉に祈る「通声(トソン) 祈祷」など、さまざまです。

最後に、お願いがあります。どうか、他者に目を向けていただけますように。東神大には韓国の神学大学院を卒業してこられた方たちがいらつしゃいます。親しく交わりを持っていただきたい。学ぶこと、教えられることがたくさんあります。韓国の方々をはじめ、海外から来られた留学生の方々との交わりを深め、遠慮なく、隣人になることの意味と大切さを心に留めていただき、共に祈り、共に生きていかねば、新しい展望と希望が開かれるにちがいない、と期待しています。繰り返しますが、善きサマリア人から学んでください。

(要約 大学院前期課程 重村智計)

「祈りの生活 ——心の目が照らされることを願いつつ」



日本基督教団代田教会 牧師 平野 克己

礼拝と祈り・神の臨在の前で

東京神学大学を卒業して35年。私も残された日々を数える年代になりました。このような時期に皆さまと過ごせることをありがたく思います。「修養会」は英語では retreat。軍隊用語でもあり「退却ラッパ」と訳されます。戦場にラッパが吹き鳴らされる。それぞれが派遣されている局地戦から一時撤退し、栄養補給し、傷を癒し、全体の眺めを確認する機会です。今年入学した神学生、卒業と派遣を間近にする神学生、教授もそしてこの私も、一緒に祈り、語り合い、養われ、癒され、私たちのつとめを捉え直す2日間となることを願っています。

いただいた主題は「礼拝と祈り」。礼拝について、私がいつも心に刻んでいるのはこの言葉です。「あなたが洗礼を受け、あるいは聖餐にあずかり、またあなたが赦免を求め、説教が語られているとき、天は開かれている。……たとい鉄のごとく、鋼のごとき雲が我々のうえにあり、天をすっぽりおおいつくしたとしても、決して我々を邪魔することはない。それでも我々は、神が天から我々に語られるのを聞く。そして、神に叫び、神を呼ぶとき、神は我々の願いを聞き、我々に答えてくださる」(マルチン・ルター)。

りの修練が必要です。

イエズス会の司祭養成プログラムは、修練期・哲学期・中間期・神学期、約10年にも及び、叙階後も約8か月の修練を課すのだからです。しかもこれを「イエズスの伴侶への道」と称します。祈りの訓練と黙想を通して、主イエスに対する愛を培っていくのです。修道院をもたない私たちプロテスタント教会でも、それは変わらないはずで、日常生活において祈りの修練を重ねること、それが教会に仕える私たちの生活のすべてです。

主の祈り——主イエスと共に歩む旅

修道院の外側、この世のただ中で生きる私たちにとって、祈りの修練の中心は「主の祈り」です。ルターは、「主の祈りは世界で最大の殉教者」と言いました。礼拝を司る私たち自身が、この祈りを呪文のように唱えているだけなら、礼拝ごとに主の祈りを殺してしまうことでしょうか。

主の祈りは、主イエスと弟子との旅の始まり(マタイ)、あるいは旅の途中(ルカ)で、主ご自身が教えてくださった言葉です。どの言葉も自分の心から自然にわき上がってくる祈りではありません。主の祈りは、私たちの心の外から訪れ、私たちに特別な歩みを求めてくる祈りです。私たちは主の祈りを祈り、日々の歩みの中で主イエスの声と姿を捜し求め、私たちの生が飲み尽くされてしまふことを願います。

主の祈りは、メロディーが付けられて歌にされてきました。たと

えば、深い悲しみのとき(マーヴィン・ゲイ)、また、立ちほだかる敵を前にして神を祝うとき(映画「サラフィナ」)、主の祈りが歌われます。私たちはいまだ神の名が聖とされていらないこの世界で、しかしそれでも、神の名を聖としながら、主イエスと共に旅を続けます。そして、主の祈りを祈りつつ主イエスに従う旅を続けるとき、将来を先取りしながら現在を歩む「新しい人」が造り出されます。主イエスこそ、新しい人であられるからです。

自分の言葉で祈る 代々の祈り手から学びながら

私たち日本のプロテスタント教会の多くは、主の祈りを除けば、「成文祈禱」ではなく「自由祈禱」をもって祈ります。自由祈禱の特質は、自分の自由な言葉で神に語りかけるところにあります。しかし残念なことに、その自由なはずの祈りの言葉がある種の定型化・形骸化していると思います。祈りの言葉が、礼拝する心を揺り動かすことが少ないのです。ですから、今こそ「成文祈禱」から祈りの言葉を学び直すことが大切です。

きつと様々な祈禱集が役立つことでしょうか。私が編集した『祈りのともしび』2000年の信仰者の祈りに学ぶ』もまた、そのための一冊です。

「主よ、私の魂の家はとて狭いのです。どうか広くしてください——あなたがお入りになれるように」(アウグスティヌス)

「ごらんください、主よ、満たされる必要のあるむなしの器を。

……私の信仰は弱いのです。どうか、強くしてください。……わたしは罪人であり、あなたは正しく、わたしは罪にまみれ、あなたのうちには義が満ちあふれています。ですから、わたしはあなたと共にいたいのです」(ルター)

いずれも、父なる神に対する祈りではなく、主イエスに語りかける祈りであることに心を惹かれます。そして、私の心を強くゆるさぶる祈り、フランシスコ・ザビエルの祈りもまた、主イエスに語りかけています。

「主よ、私があるあなたを愛するのは天国を約束されたからではありません。あなたにそむかないのは、地獄が恐ろしいからではありません。主よ、私を引きつけるのはあなたご自身です。私の心を揺り動かすのは、十字架につけられ、侮辱をお受けになったあなたのお姿です。あなたの傷ついたお体です。そうです、主よ、あなたの愛が私を揺り動かすのです。ですから、たとえ天国がなくても、主よ、私はあなたを愛します。たとえ地獄がなくても、私はあなたを畏れます。あなたが何をくださるらなくても、私はあなたを愛します。望みが何もかなわなくても、私の愛は変わることはありません」

この祈りが、ザビエルを日本伝道へと駆り立てました。

礼拝と祈り。きつと難しい理屈ではないのです。十字架のキリストを愛すること。ただそれだけが、私たちの祈り、そして私たちが仕える教会をよみがえらせるのです。

(要約大学院前期課程 中根一茂)

「日本における伝道の根本課題

～戦時下の『日本的キリスト教』を読んで考えたこと～



東京基督教大学 特任教授・前学長 山口 陽 一

日本伝道研究所の趣旨をふまえて、日本における福音伝道の根本課題を考えてみたい。教派を超え500年のスパンで、日本キリスト教史の視点から実践神学的に「根本問題」を考察する。ここでは共同研究「日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか」を手掛かりとする。5人の研究者が「KJ法」で集めた393の「実を結ばなかった理由」は、およそ思いあたる原因を網羅している。そこで濱野道雄は「福音宣教以前に『マジョリティの中に入っているかどうか』ということが、神学的にも実践的にも命題になってしまっている。悪循環の始まりである」と言う。これは393の原因の前提となる重要な指摘である。これを「マイノリティ・コンプレックス」と言い換え、その克服を「日本における伝道の根本課題」、「殉教の復位」として考えた。そのためにアジア太平洋戦争期の「日本的キリスト教」を考察する。これは日本キリスト教史においてマイノリティ・コンプレックスが最も悪いかたちで現れた例である。

幕藩体制期、民は村の鎮守の氏子であり、家は寺の檀家であった。こうした宗教事情に起因して、神道と仏教系の包括宗教法人の信徒数は、2020年時点での1億8千万人であり、1995年の2億2千万人からは17・6%激減している。ある調査によれば、日本人で信仰を持っている人は36%、信仰している宗教はない人は62%である。こうした信仰のない宗教を特徴とする日本においては、キリスト教人口1%を問題視し過ぎない方がよい。自ら「マイノリティ・コンプレックス」に陥るようなものである。「日本的キリスト教」について、久山康は、神道とキリスト教の習合による皇道的キリスト教と、日本の風土にキリスト教を根づかせる試みの二つの流れを指摘し、熊野義孝は後者の例として魚木忠一と比屋根安定に注目した。鈴木範久は日本のキリスト教を「従属」「共存」「対立」に、笠原芳光は「混淆」「両立」「触発」の3類型に分類する。佐藤敏夫は主流の教会は日本のキリスト教によって影響を受けることはなかったとしたが、土肥昭夫は当時の日本基督教団の全体がこれに陥ったとする。私はこの3年、『福音と世界』の連載「日本的キリスト教を読む」において、アジア太平洋戦争期に叢生した有名無名の日本のキリスト教の人と書物を42人・55冊紹介している。信徒や神学以外の分野の研究者も相当数おり、留学や海外経験を持つ人の割合も多い。最も多い立場は「両立」型であり、その源流が小崎弘道である。彼は1912年の三教会同を日本伝道の好機ととらえ、「日本帝国の教化」（1929年）を語る。キリスト教は国体と融合し、牧師が非宗教の神社の宮司になれるような構想である。小崎は38年に81歳で亡くなるまで日本のプロテスタント教会の中心を歩んだ人で、1928年の天皇即位の折、キリスト教ではただ一人

金杯を受けた。織豊政権は「仏法為本」の中世的宗教権威を減ぼして懐柔し「治教」として体制に取り込んだ。幕藩体制期にはキリシタン弾圧を梃子に神儒仏による現世支配の「神国」体制がつけられ、「王法為本」が確立した。仏教は檀家制度と寺請制度により体制の戸籍係とされ、日本の宗教は政治支配の絶対化に「否」を言う役割を手放すことで生き延びた。芦名定道が「キリシタン時代から現代へ、日本宗教を展望する」において「国家権力に正面から立ち向かう宗教の姿勢」を展望し、「非暴力抵抗」の意義を語るのは、そのゆえである。井上哲次郎は1890年代の「教育と宗教の衝突」論争において、キリスト教は個人的倫理を担い「非国家的精神を排除して、専ら個人的倫理を維持する方針を取るべき」と主張した。それから半世紀、日本のプロテスタント教会は井上の示唆した道を進み、「日本的キリスト教」に行き着いたのである。

日本キリスト教史において最も重大な出来事はキリシタンの殉教である。1549年以降1630年代の初期までの80年間の受洗者は76万人、1614年の信徒数は37万人前後と推定され、カトリックの列聖列福特別委員会、氏名・日時・場所がわかる殉教者は5500人、実数は2万人としている。教理問答『どちりなきりしたん』は、キリシタンを「かんようなる時はしするといふとも、ことばにも、身もちにもあらはすべきとのかくごある事もつばらなり」と定義した。このような生き方が殉教により絶えた後、鎖国、絵踏み、宗門改め、寺請、檀家、五人組などの徹底した禁教政策によってキリスト教を拒絶する制度がつけられ、キリシタン国害論が植え付けられた。これは強いトラウマである。G. D. レーマンは「最初の出会いの重要性はその敗北の結果にある。いわば迫害時代の経験によって日本人はキリスト教という伝染病にかからないように効果的な予防注射を受けたようなものである」と言った。「殉教」は信仰の遺産ではなく「負の遺産」となり、近代における伝道は「国害」論の克服のため「報国」の志を掲げた。「日本的キリスト教」は「殉国は殉教」と考え、殉教しないキリスト教となつた。渡辺信夫は「国のために死ぬ覚悟をどういう関係づけにおいて持ったか」という点に致命的欠陥があります。ここに私の戦争責任の核心部分があることに戦後気づきました」と述べる。彼はカルヴァンに学び、キリシタンの殉教、朱基徹の殉教や趙寿玉の生き方から、神への従順ゆえの殉教に注目し、「殉教の復位」を語った。「殉教の復位」は、殉教礼賛や殉教の奨めではない。それは日本人の99%に福音を証しすることにおいて、1%の教会の信仰を徹底することである。殉教など起こさせない社会をめざして殉教の信仰に生きるこ

「福音を生きる：伝道者の靈性」



東京神学大学 教授 小 泉 健

1. 伝道者の務めの本質

伝道者の務めは、第一に「神の召命から」来ます。それと同時に「教会の委託によって」与えられます。この両者がどのように関係しているかも問題となります。

伝道者の務めの根源にあるのは神のご意志です。神が伝道者の務めをお立てになり、そこに人をお召しになります。伝道者は「キリストの存在、生涯、働きの継続」(アウグスト・フィルマール)において仕え、キリストのみわざが今ここでも起きることを追い求めます。そのために、「恵みの手段」を管理すること、すなわち、神の言葉を宣べ伝えることと、聖礼典を執行することを担います。これらの恵みの手段を通して、神はキリストにおける救いを世にもたらされます。

教会は神の召しを受け止め、伝道者を教会の教師として立てます。洗礼によつてすべてのキリスト者が祭司へと任職されており、必要な場合にはだれでも洗礼を受け、罪の赦しを宣言できるのですけれども(全信徒の祭司性)、教会の秩序のために、祭司の務めの具体的な執行は伝道者に託されます。

その際、伝道者・牧師は教会での働きを独占するのではなく、信徒を形成し、信徒の働きを支え、信徒と牧師が教会を造り上げるのですし、教会は牧師の説教と教えが福音にかなっているかどうかを見守る責任があります。

2. 召命と資質・能力

伝道者に求められる資質・能力があります。聖書や教理についての理解、それを人に伝える力、他者の痛みに共感する力、他者の魂の状態について洞察する力などです。神学教育、伝道者養成は、伝道者に必要な資質・能力の向上のためと言えます。

しかし、人間の資質・能力がその人を伝道者にするわけではありません。神はふさわしくない者をお召しになります。資質・能力を問わないのです。神はその人を伝道者にするのがおできになり、ご自分の御用のために用いることがおできになります。召された者に必要なのは、神に信頼し、お従いすることだけです。

そのことを踏まえて、教会は教師を立てるにあたり、何よりも召命を吟味します。また、資質・能力をも問いますが、能力に秀でていることを求めるのではなく、神の召しに答える献身の姿勢があるか、伝道者の務めと結びついた任務および仕事への願いと努力があるか、そのために必要な個人的で無理のない形での備えがあるかどうかを問います。

3. 職務と人格

伝道者論は伝統的に「職務」と「人格」の二つの側面から考えられてきました。その際、プロテスタント教会は職務から(のみ)伝道者について考察することが多かったと言えます。プロテスタント教会は伝道者

を「御言葉と聖礼典の奉仕者」とし、その務めを突き詰めれば「御言葉の務め、説教職」であるとしてきました。それに対して、現代においては、伝道者の務めをより多様に考えるようになっていきました。たとえば、キリスト教的な価値の伝達者、人知を超えたものの代表だということです。しかし、時代の声に惑わされず、伝道者の職務は、「そもそも自分は神から何に召されているのか」を問うことによつて考えるべきです。

また今日は、伝道者を職務だけで考えず、「伝道者とは何者か」と、その人格を問うようになりました。伝道者とは、信仰をもつて生きるこの見本だということです。そして、職務の遂行においても、人格的なかかわりが重視されるようになっていきました。ただしここでは、自分の人格の力(すなわち、資質・能力)で職務を担うのではなく、伝道者の職務がもたらす人格性があると考えるべきでしょう。神の召命は務めを与えるだけでなく、人格の形成に至ります。

4. 福音の担い手

伝道者は神に召された者であり、その召しに応えるために人生を献げ、また、託された務めのゆえに人格と靈性とを向上させ続けます。伝道者の職務にはすでに触れましたが、キリストご自身の働きに奉仕する、という観点から、改めて考えます。キリストが担ってください

務めについては、「キリスト／メシア(油注がれた者)」の務めから、王・祭司・預言者の三重の職務が考えられてきました。伝道者はキリストの代理ではありませんが、キリストの体、キリストの道具として、この三重の務めを担います。その際、王の務めは羊飼いとて羊の世話をすることであることを大切にしたいと思えます。祭司の務めとして与えられているのは、祈りと賛美により礼拝をお献げすることです。預言者としての務めは福音を告げ知らせ、人々が主イエスにおける神のご支配にあずかるまでにすることです。

これらの務めを果たすための土台となる働きとして、執り成しの祈りを挙げたいと思えます。モーセは破れ口に立って祈りました。アモスが幻を示された時、まずしたことは、それを語るのではなく、執り成して祈ることでした。この世の苦しみを受け止めてうめき、神の裁きの下に立ち、執り成しの祈りを献げたいと思えます。そこから、羊の世話をすることも、礼拝を献げることも、福音を告げ知らせることも生まれてきます。

神学校は福音を明確に捉えることを教えます。それを踏まえ、自分が「福音を生きる」ことが続きます。そのためには、生涯にわたる「靈的同伴」も重要です。

新卒業生の声



矢島 若葉



増尾 隆司



杉田 流司



佐藤 晏



金 奎植



北田翔太郎

「主われらを愛す」

北田翔太郎

遂に卒業を迎えました。お祈り下さった皆様と、私を励まし、時に叱って下さった信仰の先輩たちや仲間たちに、心から感謝致します。私が修論で扱った神学者のカール・バルトは、学生から「あなたに神学を一言で言うとうなりますか?」と聞かれて、「『主われらを愛す』の歌詞です」と答えました。私の四年間も、一言で言えば「主われらを愛す」の歌詞の通りでした。「主は強ければ／われ弱くとも／恐れはあらじ」十字架の主の愛によって、生かされてきました。そして、この主にお仕えるために、ここから歩み出します。主が私を清めて、良き働きをなさしめて下さりますように。

「全ての導きに感謝」

金 奎植

主の御名を賛美致します。私は学部1年から東京神学大学に入學し、6年間の学びを許されました。率直に言うと6年間の学びの中、外国人である私には言語の壁や文化の違いなどで大変な瞬間も多々ありました。しかし、大変な時にも主なる神様からいただいた「日本の地で福音を宣べ伝える伝道者として生きる」という召命を信じました。だからこそ、苦しみをも自分をより良き伝道者になれるように鍛錬して下さる神様の御恵みとして受け取ることができました。東京神学大学での全ての学びを見守って下さり、卒業まで導いて下さった神様に感謝を申し上げます。

「ただ主に従って」

佐藤 晏

神学校の4年間では、私自身の決意や熱心の不確かさと、そんな私を決して離さないでいて下さる神様の確かさを何度も教えただけで済みました。また、伝道者として立てられていく歩みが決して自分一人のものではなく、多くの方の祈りと支えの中にあることも繰り返して知らされました。私が気付く時も気付かない時も、多くの守りと導き、祈りと支えがあったことを思い、改めて感謝いたします。

「御使いの声にあわせて」

杉田 流司

「黙示録の御使いはどうしていつも大声で叫ぶのだろう」。ある講義でこんな話になったことがありました。東神大での楽しかった思い出の一つです。

一つの理由は「その真剣さ」だと思います。御声に従って悔い改めることがなければ、私たちは滅んでしまうからです。また、もう一つの理由は「その喜び」ではないでしょうか。イエス様がお生まれになった！イエス様がよみがえられた！御使いたちも自然と、大きな声になってしまふのです。私たちもその御声を聞かせていただいています。ですから、御使いたちの声にあわせて、私たちがまた福音を届けていきたいと思えます。

「神学の天国」

増尾 隆司

本学の公開夜間講座で神学の楽しさの入り口に立てた私にとつて、学部編入学後の4年間は「神学の天国」にいる日々でした。振り返ってみればあつと言う間に過ぎた4年間で、毎日が本当に充実していましたが、この日々を支えてくださった諸先生方、職員の方々の皆さま、年かかさの私を仲間に入れてくださった同級生の皆さんに心から御礼申し上げます。しかし「神学の天国」は究め難く、まだまだ知らないことばかりです。これから「伝道の天国」に遣わされますが、神学の学びを忘れずに続けていきます。心残りな濃密な交わりが味わえなかったことでした。

「感謝！」

矢島 若葉

私の献身を喜び、ともに歩んでくださった方々へ。献身を通して出会えた方々へ。神様の導きのもと、兄弟姉妹の祈りに支えられ、無事に卒業の日を迎えることができました。この4年間、至らなさや不相应さに挫折そうになることも多々ありましたが、その度に祈られて力を得ることを思い出し、再び立ち上がることを得ることができました。祈りに支えられていることを実感する毎に、神様とともに歩んでいることを改めて知る機会となりました。これからの歩みかどのようなものとなるかは分かりませんが、神様の道の確かさは知っています。これからも祈りつつ、期待しつつ励んでまいります。

「神学」86号 発行のご案内

神学会委員長 本城 仰太

「神学」86号が2024年12月に発行されました(定価2,800円+税)。主題は「伝道者論」で、2025年1月の「教職セミナー」の主題「福音の担い手・伝道者論をめぐって」に合わせたものです。「伝道者」を問うことなしに「伝道」の議論だけを行っても実りは少ないかもしれません。本号を通じて「伝道者論」が深められ、教会に伝道の実りが与えられることを願っています。

主題にかかわる四つの論文が寄せられています。それぞれの視点や切り口は異なりますが、聖書や古代の伝道者論から始まり、現代の読者の皆さまの考察へとつなげていただければと思います。自由研究として、パウロ研究を続けておられる河野克也先生より、パウロの黙示的福音に関する論文が寄せられました。また、宮崎薫先生は2024年4月に本学において博士(神学)の学位を取得され、昨年4月より本学での授業を本格的に担当しておられます。今号ではその博士論文の後編が掲載されています。朴大信先生は博士課程後期でエーペリンク研究を続けておられ、その論文を寄せてくださいました。

【主題論文】

- 言葉と実在の「あわい」について 神代真砂実
- 伝道者の語る言葉をめぐる 田中 光
- 旧約預言者の職務の特徴について 田中 光
- 伝道者アウグステイヌス「説教」213における「信条の伝達」その翻訳 本城 仰太
- カイサリアのパシレイオスの書簡から見る「伝道者」像についての一考察 飯田 仰

【自由研究】

- パウロの黙示的福音(2)「ローマの支配を無力化する神の支配」 河野 克也
- 旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史の変遷と陰影(後編) 宮崎 薫

【博士課程後期生論文】

- G. エーペリンクの「信仰の教義学」——「信仰論」と「教義学」の狭間で 朴 大信

〇〇〇 奨学金献金のお願い 〇〇〇

東京神学大学のために日頃からお祈りとお支えをいただき、心から感謝を申し上げます。

世界が多くの混乱と分断の中で苦悩を経験している中において、私たちの学び舎には多くの献身者が与えられ、キリストの福音を世界に宣べ伝えるための準備の時を過ごしています。神学教育にとっては、顔と顔を合わせながらの人格形成的な教育が不可欠です。ほぼ完全にコロナの危機からも抜け出し、学び舎で共に生活をしながら、共に学ぶ生活を取り戻せたことは、本当に感謝です。入学式、全学修養会、クリスマス礼拝・祝会、卒業礼拝、卒業式など、クラス以外の諸行事も、ほぼこれまで通りに行うことができています。このように学生、教職員ともに力を合わせながら、豊かな学びの一年を過ごすことがゆるされました。それもまた、日頃からの皆様の祈りと献金によって支えられていたことを思いますと、感謝に堪えません。

まもなく新しい学生たちを迎えて、2025年度の歩みを始めることがゆるされています。そこで今改めて、皆様に奨学金のための募金をお願いいたしたく存じます。とくに「指定奨学金」と「入学時奨学金」を必要としています。「指定奨学金」とは、経済的に困窮している学生の申請に基づき、審査を経て支給される奨学金です。「顔の見える奨学金」とも呼ばれ、毎年献金者の皆さんに受給学生たちがお礼状を出す努力を続けています。また「入学時奨学金」は、入学時の経済的負担を少しでも軽減するために設けられた奨学金制度（入学年度前期の学費に充当）で、毎年多くの新入生に支給されています。

現在、東神大で学ぶ学生の年間の校納金は50万円を超え、入学時の納付金は100万円を超えます。これに生活費が加わるわけですから、多くの学生が苦勞しています。神学生たちは厳しい学業の合間にアルバイトをして努力しています。また神学生の在籍教会、出席教会も彼らを経済的に支えようと努力してくださっています。しかし十分ではありません。学生たちの経済的負担を少しでも軽減するために、より豊かな奨学金の財源が必要となっています。どうか、このことをご理解くださり、皆様の温かいお祈りとご協力を賜りますよう、心からお願ひ申し上げます。

とくに本学を卒業された教職の皆様、どうか後輩たちの生活を支えるためにご協力ください。よろしくお願ひ申し上げます。

東京神学大学 奨学金委員長 中野 実

なお、お振込の際、「指定奨学金」の場合は「奨学金献金」、そして「入学時奨学金」の場合は「入学時奨学金献金」とご記入ください。郵便振込の口座は次のとおりです。

口座番号：00150-5-5032
加入者名：学校法人 東京神学大学

公開夜間神学講座のすすめ

学外活動委員長 中野 実

東京神学大学の夜間講座は、長い歴史を持つ、日本ではユニークな神学の学びの場です。2025年度には、79期生を迎えることとなります。発足以来、講師陣には、本学で教える教員のほとんどが加わっており、神学という学問の深さ、広さを味わうことのできる貴重な機会です。さて、ここに2025年の新しいプログラムをお伝えできますことを、心よりうれしく思っています。2025年も、講師陣に新しい顔ぶれを加えるなど、さらに充実した学びの機会を提供できるよう準備しています。旧約聖書神学、新約聖書神学、組織神学、歴史神学、実践神学、キリスト教音楽、キリスト教美術など、広い領域にわたる講義が提供されており、他教会の信仰の友と共に、楽しく充実した学びを経験できます。2年間で全科目を修了する「正規生」のみならず、自分のペースにあわせて受講できる「科目受講生」、またお好きなクラスだけを受講できる「聴講生」制度もあります。ぜひ一人でも多くの方が受講されることを切に願っています。

2025年4月開講 申込受付中

▽会場 場：日本基督教団銀座教会

4月～5月 (月)「教会史入門」 本城 仰太

▽受講日：毎週月・金曜日

(金)「福音書を読むⅡ」 三永 旨従

▽時間 間：午後6時～8時

5月～7月 (月)「詩編によって祈り、賛美するために」 田中 光

▽受講料：1万2千円（1講座）

(金)「聖書物語だけじゃない！キリスト教美術」 真下 弥生

▽面談料：1千円（初めての方のみ）

9月～10月 (月)「キリスト教教理の基礎Ⅰ」 菊地 順

◎定員（各講座30名）に達し次第締め切ります。

(金)「ヘブライ書に聴く」 中野 実

◎パンフレットをお送りいたします。

10月～12月 (月)「礼拝と説教」 小泉 健

お問い合わせ・資料請求など

(金)「現代神学入門」 須田 拓

東京神学大学 学外活動委員会

1月～3月 (月)「やさしいヒブル語入門」 宮崎 薫

(夜間講座事務局)

(金)「相互教会ケア」 W. ジャンセン

0422-32-4185

夏期伝道実習の実習生受け入れのお願い

本学の夏期伝道実習にご協力いただいていることを深く感謝いたします。夏期伝道は伝道者養成においてきわめて重要です。神学生はここで伝道者となるための訓練を受け、適性が吟味され、召命を問いつつ直すこととなります。実習生を受け入れ、伝道者養成のわざをお助けいただければ幸いに存じます。

他方、神学生の数が減っているため、申し込みをさせていただいても、すべての教会には実習生を派遣できなくなっています。数年に一度、実習生の派遣をお休みさせていただかなければなりません。どの派遣先にも均等に休みの年が回ってくるようにしますので、ご理解をお願いいたします。

1 (位置づけ) 夏期伝道は日頃の教育と訓練を集大成する場です。学部4年次の実習への評価は、大学院への進学に際しての重要な判定資料の一つともなります。

2 (内容) 実習にあたっては、事前の指導をし、事後には教員と一対一での振り返りの面接をします。

伝道者の使命は御言葉の奉仕にありますから、実習生がその機会を与えられて訓練され、また吟味されることを願っています。しかし、準備の過程で「この神学生には奉仕をゆだねられない」という判断が行われることはあり得ることだと承知

しています。

3 (費用) 交通費、滞在費等は原則として教会で負担くださることをお願いしています。経済的な大きな負担をいただいていることを感謝します。やむを得ない事情によっては、交通費を本学が負担することもありますので、ご相談ください。

4 (申込) 4月末日までに本学教会実習委員会宛てに書面にてお申し込みください。定まった書式はありませんが、申し込み用紙が必要ならご請求ください。電子メールに添付してくださいてもかまいません。宛て先 ken.koizumi@tuts.ac.jp。

5 (期間) 8月3日～31日が実習期間です。学部4年生と大学院1年生を派遣します。(8月1日までに授業があります。後期は9月17日から。)

6 (お願い) ①実習生の年齢、性別、所属教派、国籍は多様です。女性や年齢が高い者もいますので、宿泊環境、プログラム等を整える際、ご考慮ください。②実習生は弱い立場にあります。人格が重んじられるように、配慮をお願いいたします。③上記のとおり学生が少なくなっており、一昨年は七カ所、昨年は五カ所にお断りしなければなりません。派遣できない場合はご容赦ください。

東京神学大学教会実習委員会 小泉 健

◇第六回日本伝道フォーラム開催のご案内◇

日時…2025年6月2日(月)～3日(火)
場所…東京神学大学
主題…「これからの教会と日本基督教団」
内容…主題講演、伝道報告、テーマ毎のワークショップなどを予定。

日本伝道フォーラムを、東京神学大学のキャンパスを会場に、久々に対面で開催いたします。日時は2025年6月2日～3日(月～火)です。コロナの危機の間はオンラインで、昨年は再開のための準備期間として休会としていました。対面での日伝フォーラムは2019年度以来となります。今からご予定に入れていただき、近隣の先生方もお誘い合わせのうえ、ぜひご参加ください。

まだ詳しいプログラムは決まっていません。もともとこの会は、日本伝道協議会(1990年開始)にルーツを持ち、日本基督教団の抱えている様々な課題、問題を取り上げ、共に神学的に学びつつ、同じ教会的ヴィジョンを与えられるための会でした。日本伝道協議会も、日本伝道フォーラムも、(誤解されているかもしれませんが)東京神学大学主催の会ではなく、日本基督教団を、さらに日本の教会全体を福音にふさわしく形成しようとする有志からなる準備委員会、実行委員会によるものです。現在、その準備、実行委員会の再編が必要となっています。そのような中であって、「とにかくまず会を再開しよう」と願う有志の先生方が今回は手を挙げてくださり、彼らの導きのもと、今プログラムを準備しています。近いうちに、詳しいプログラムをお知らせできると思います。東京神学大学のホームページなどをよくご覧くださり、ご参加をぜひご検討ください。よろしくお願いたします。

問い合わせ先…

東京神学大学 日本伝道フォーラム
準備委員会 事務局(中野)

告知板

2025年度継続教育開講科目

受講資格：キリスト教会の牧師・伝道者
 授業開始：前期／4月5日(土)
 後期／9月17日(水)
 申込期間：前期／受付は終了しました。
 後期／7月18日(金)～7月31日(木)
 受講料：1科目(1学期分) 14,000円
 申し込み・問い合わせ：学外活動委員会(事務担当：教務課)

開講科目

- 旧約聖書神学
 - 前期
 - 旧約聖書学演習Ⅰa (矢田洋子 特任常勤講師) 火曜日V限
 - 旧約聖書原典講読Ⅱa (田中 光 教授) 火曜日Ⅲ限
 - アラム語a (佐藤 泉 講師) 金曜日Ⅳ限
 - 旧約聖書学特研Ⅰa (田中 光 教授) 水曜日Ⅳ限
 - 後期
 - 旧約聖書学演習Ⅰb (矢田洋子 特任常勤講師) 金曜日V限
 - 旧約聖書原典講読Ⅱb (宮崎 薫 常勤講師) 木曜日Ⅰ限
 - アラム語b (佐藤 泉 講師) 金曜日Ⅳ限
 - 旧約聖書学特研Ⅰb (田中 光 教授) 水曜日Ⅱ限
- 新約聖書神学
 - 前期
 - 新約聖書原典釈義Ⅰa (遠藤勝信 講師) 火曜日Ⅳ限
 - 新約聖書原典釈義Ⅱa (三永旨従 講師) 木曜日Ⅳ限
 - 新約聖書学特研Ⅰa (河野克也 特任准教授) 水曜日Ⅱ限
 - 新約聖書学特研Ⅱa (山口希生 特任准教授) 金曜日Ⅱ限
 - 後期
 - 新約聖書原典釈義Ⅰb (遠藤勝信 講師) 火曜日Ⅳ限
 - 新約聖書原典釈義Ⅱb (三永旨従 講師) 木曜日Ⅳ限
 - 新約聖書学特研Ⅰb (河野克也 特任准教授) 水曜日Ⅳ限
 - 新約聖書学特研Ⅱb (山口希生 特任准教授) 金曜日Ⅳ限
- 組織神学
 - 前期
 - 組織神学特講Ⅱa (須田 拓 教授) 水曜日V限
 - 信条学 (須田 拓 教授) 金曜日Ⅰ限
 - 組織神学演習Ⅱa (神代真砂実 教授) 水曜日Ⅰ限
 - 後期
 - 組織神学特講Ⅱb (須田 拓 教授) 水曜日V限
 - 組織神学演習Ⅱb (神代真砂実 教授) 水曜日Ⅰ限
- 歴史神学
 - 前期
 - 教会史特講Ⅱa (藤本 満 講師) 木曜日Ⅲ限
 - 教理史演習Ⅱa (本城仰太 准教授) 金曜日Ⅲ限
 - 後期
 - 教会史特講Ⅱb (藤本 満 講師) 木曜日Ⅲ限
 - 教理史演習Ⅱb (本城仰太 准教授) 金曜日Ⅱ限
- 実践神学
 - 前期
 - 実践神学演習a (小泉 健 教授) 木曜日Ⅱ限
 - 臨床牧会教育a (W.ジャンセン 教授) 月曜日Ⅲ限・Ⅳ限
 - キリスト教教育特研a (長山 道 教授) 木曜日Ⅰ限
 - アジア伝道論演習a (飯田 仰 助教) 木曜日V限
 - 後期
 - 実践神学演習b (小泉 健 教授) 金曜日Ⅰ限
 - 臨床牧会教育b (W.ジャンセン 教授) 月曜日Ⅲ限・Ⅳ限
 - キリスト教教育特研b (長山 道 教授) 木曜日Ⅱ限
 - アジア伝道論演習b (飯田 仰 助教) 火曜日V限

※ 2025年4月1日付職位にて記載

二〇二五年三月七日発行
 東京神学大学報・三三二号
 〒181-0015 東京都三鷹市大沢三一一〇一三〇
 東京神学大学広報委員会
 電話 〇四二二一三三二一四一八五
 FAX 〇四二二一三三二一〇六六七
 郵便振替 〇〇一五〇一五〇一五〇三二
<https://www.tufs.ac.jp/>

加藤 久雄氏 2024年12月22日
 逝去されました。(1955年6月)
 加藤 哲氏 2025年1月24日
 逝去されました。(1984年1月)
 佐野 英二氏 2025年1月29日
 逝去されました。(1967年1月)

- 3月7日 卒業・修了式
 告辞・神代真砂実学長
 励ましの辞・教団総会
 議長 雲然俊美牧師、
 気賀教会 楠本史郎牧
 師
- 3月10日 公開夜間神学講座 修了式
- 4月1日 入学式・前期始業式
- 4月1日～3日 新入生・新編入生

- 3月6日 卒業礼拝
- 3月7日 卒業式
- 3月10日 資金管理運用委員会 銀座教会
- 4月21日 全国委員会 銀座教会
- 4月14日 第1回東京地区推進委員会 銀座教会
- 4月14日 第1回東京地区推進委員会 銀座教会
- 4月21日 全国委員会 銀座教会
- 4月21日 全国後援会総会 (銀座教会)

- 3月10日 常務理事会(本学)、卒業式
- 3月6日 卒業礼拝
- 3月7日 卒業式
- 3月11日 常務理事会(銀座教会)、資金管理運用委員会、公開夜間神学講座修了式
- 3月24日 定期評議員会(銀座教会)
- 4月1日 入学式
- 4月4日 公開夜間神学講座開講式
- 4月14日 東京地区推進委員会(銀座教会)
- 4月21日 全国後援会総会(銀座教会)
- 3月10日 逝去されました。93歳。(1961年東京神学大学院修了)
- 高倉 謙次氏 2024年11月15日 逝去されました。(1961年東京神学大学院修了)
- 菅生 昌利氏 2024年11月26日 逝去されました。(1964年東京神学大学院修了)
- 大島 力氏 2024年12月9日 逝去されました。(1981年東京神学大学院修了)
- 清島 恒徳氏 2024年11月14日 逝去されました。(1969年東京神学大学院修了)
- 勇 文人氏 2024年10月2日 逝去されました。63歳。(1999年東京神学大学院修了)

2025年度 公開夜間神学講座

聴講生募集

1科目からどなたでも受講できます。

受講日：毎週月・金曜日
 時間：午後6時～8時
 場所：銀座教会
 定員：各講座30名
 受講料：12,000円(1講座)
 面談料：1,000円(初めての方のみ)
 申込締切：受講講座が始まる2週間前

◎パンフレットをお送りいたします。
 お問い合わせ・資料請求は学外活動委員会まで

2025年度 前期・後期科目等履修生

受講資格：福音主義のキリスト教会の教職またはそれに準ずる者で、教員免許取得のために本学学部科目の履修を希望し、教授会の選考によって許可された者。

受講期間：前期／受付は終了しました。後期／2025年7月18日(金)～7月31日(木)
 申込に先立って、必ず教務課主任のガイダンスを受けること。
 受講料：1単位 20,000円
 審査料：10,000円

申し込み・問い合わせ：教務課

学事往来

2024年度大学院前期課程修了者、学部卒業発表
 3月入学者選抜実施日
 3月入学者選抜合格発表
 卒業礼拝 説教・仙台
 広瀬河畔教会 望月修牧師

オリエンテーション 公開夜間神学講座 開講式
 前期授業開始
 クラス別懇談会

【理事会関係】
 3月7日 第561回常務理事会 東京神学大学
 3月10日 第562回常務理事会 銀座教会
 3月24日 第256213回定期評議員会 銀座教会

【後援会関係】
 4月14日 第1回東京地区推進委員会 銀座教会
 4月21日 全国委員会 銀座教会
 4月21日 全国後援会総会 (銀座教会)

【訃報】
 勇 文人氏 2024年10月2日 逝去されました。63歳。(1999年東京神学大学院修了)

公示

宮崎 薫特任常勤講師
 2025年4月1日付で常勤講師に任用する。
 2025年4月1日付で特任准教授に任用する。
 山口 希生氏